

令和4年7月9日（土）

信濃教育会 研究発表会 東北信 B（長野市立南部小学校）

佐伯胖所長 開会の挨拶

おはようございます。今日は第74期の研究員の第2回目の研究発表会になります。この大変な時期に会場を提供して下さった、長野市立南部小学校皆様には心から感謝申し上げる次第であります。

研究所の研究ということについてですね、少し考えていることがありますので、それについてお話ししたいと思います。研究所の研究は、振り返りと学び合いということが中心となっていると言われておりますが、振り返るってというのはどういうことなんでしょうね。振り返りと言うと、まあ、反省とか省察とかって言うように言い換えてもいいかと思えます。で、それを英語で言えばですね、“reflection”ということになるかと思うのですが、その“reflection”についてはドナルド・ショーンの名著の『Reflective Practitioner』それはよく知られておりますが、その本の訳者序文の中で訳者は、「英語の“reflection”には反省と省察の二つの意味を合わせ持っている事を考えて、本書ではこの2つの訳語を文脈に応じて使い分ける」というふうに書いています。それで私は全文検索をかけてみますと、反省というのは「反省的実践」という言葉と結びつけて使っていますし、省察は「行為の中の省察」というふうに使われております。しかしこの、反省と省察の違いということについては、一切論じられておりません。

一方日本語の反省というのを広辞苑で調べますと、「自分の行いを省みること、自分の過去の行為について考察し、批判的な評価を加えること」とあります。で、自分自身に過ちがあったんじゃないかとかです。そういったことについて考えていくということになるわけです。

しかし、ドナルド・ショーンの『Reflective Practitioner』での“reflection”には、日本語のそう言った意味での反省にあたるようなことは全く出てきません。また訳者序文によりますと、ショーンの論考は元々デューイの、『How we think 一思考の方法一』の中の“reflective thought”，「反省的思考」というふうに翻訳されていますが、それを元にしていうふうに、訳者のひとりである佐藤学さんは指摘しておられますけれど、そのデューイの反省的思考ということ，“reflective thought”というもの、そこにも、日本語で言ような「反省」の意味は全く入っておりません。

ちなみに、インターネットで反省の英訳というふうに打ち込んで調べてみたら驚いたことに、「“反省”に対応する直訳英語は存在しない」とはっきり書いてありました。「日本語の“反省”の場合はこうすべきだったなどの後悔し、誤ったり、改善方法を模索したりという自分のあり様、態度などをネガティブに評価をすることになっておりますが、“reflect”にはそのようなニュアンスは全く含まれておりません」というふうに説明が入っているんですね。つまり欧米には“反省”という意味の概念そのものが、元々はないのではないかというふうにも考えられます。

しかし、研究所での研究員の振り返りに私はいろいろ付き合ってきていますけれども、やっぱり「子供への対応はこうであって良かったのだろうか」というふうな事を、非常に自ら反省するということはしょっちゅう出てくるということがあります。で、やっぱり日本の教育は根強く反省主義があるのではないかと私は思うんですが、このことについては、本田由紀さんという方の『教育は何を評価してきたか』という本があるのですが、それを見ますと日本の教育は始まった時から、態度主義－態度という事を正しく褒め伸ばすこと－が大事だということ。教育基本法をご覧になると、これはいつでもみなさん

ご覧になれますが、第二章には、5つの項目でカクカク然るべき態度とるべきである、養うべきであるという態度項目が教育の目標として挙げられているわけですね。で、そういうふうなことは元々、本田さんによりますと、やっぱり教育勅語からであると。日本の学校教育が始まったすぐ後から教育勅語というものがありまして、その段階で日本人がとるべき、私たち国民一人ひとりが取るべき態度という事を規定する、態度を強調する、その態度からずれているんじゃないかという事を反省するということが当然出てくるわけですね。

じゃあ、欧米の人はそう言った意味で自分のあり様についてああすべきだったというふうなことへの葛藤はないのかというと、そうじゃないですね。ヴィクトール・フランクルは『夜と霧』の著者ですが、その人は精神科医としてですね、自らの内面に意識が集中すること、それは神経症ですが、俗に言うノイローゼですね。ノイローゼという言葉は医学用語ではないのですが、神経症の典型的な症状だとしてそこから脱することの難しさを論じているんです。で、フランクルはそういう状況から脱するために挙げているのは、「注意を自分以外の対象に向けて、外界の事物そのものが自らの人生に意味と生きる価値を与えてくれていることに集中するのだ」と言うわけですね。

彼はそれをベルナノスの『田舎司祭の日記』という本から、引用としているんですけど、「恩寵は自分を忘れることにある」という言葉があるんですね。私が知る限り、フランクルは二つの論文で、別々の論文ですが、やはりベルナノスの『田舎地司祭の日記』からの言葉を引用していました。

で、これを、教育の面で考えてみますと、これはどういうふうに考えたらいいかと言いますと、自分自身子どもが自分の予想や期待を外れる様な行動を見た時に、自分が至らなかったんだという事を一生懸命反省するという事よりも、子どもが表している行為の背後にある本当の願いというものを、なんなんだろうか、あるいはそれを出せないというというのは何故なんだろうか。どうしてそういう事をわざと逸脱行為だとか反抗的な行為として現してしまうんだろうか、ということ、その奥にある、「よく生きたい」という思いをしっかりと捉える事ですね、「子どもの求めている事を感じ追求を支える」ということです。本当の奥深く、表面に現れていることで解釈するよりも、その奥にあるものを感じ追求を支える。あるいはこちらは、子ども一人ひとりの「わかりたい」思い。わかりたいというよりも「本当に自分はよくありたいんだ」という願いということ、そこがちゃんとしっかり見えているかどうかということですね。つまり対象そのものの中の事を、真剣に受け止めることこそ、我々は、それを真剣に聞き入ることによって、新たに一むしろ私たちがフランクルが言うように一自らの生きることの自分の人生に対する意味と生きる価値というものをそこで改めて教えられるっていうことですね。それは外界がその事を教えてくれているっていうことに集中するっていうこと、そこが実は反省主義からの回復する道であるという事を、フランクルは言っているんですね。

今日のみなさんの発表を聞きながら、本当に子どもが何を感じているのかをしっかりと受け止める、集中するっていうことが反省主義からの脱却につながると思います。本日はご参加、どうもありがとうございます。